

G C J

天草は旅人を

詩人にするらしい。

『街道をゆく』 司馬遼太郎



九州の西岸部の内海・有明海と不知火海（八代海）にはさまれ、大小約 120 にもおよぶ島々で構成される天草。古の時代から、東シナ海を通じて大陸や東南アジアとの交流があり、点在する遺跡からその名残を感じることができます。

中学校の歴史教科書に「天草四郎」「島原の乱」が必ず登場することから、全国的に知名度は高いと思われそうですが、そのわりには島のことをご存じないのではないのでしょうか。はじめて天草を訪れた方は、「島の大きさにビックリした」「島原にくっついている小さな島だと思っていた」と話されます。また天草が熊本県であることに驚かれる方も少なくありません。

天草のキリスト教

わたしが天草出身であることを告げると「クリスチャンですか？」と聞かれます。「天草→天草四郎→島原の乱→キリシタン」という連想が浸透しているようです。実際は、カトリック信者は人口の1%程度であり、わたしもクリスチャンではありません。（P.3 に続く）

コーディネーター

岩見龍一郎

PROFILE

1964年、熊本県上天草市出身。34歳まで広告代理店に勤務。平成11年一般公募により天草観光協会（当時）事務局長就任。平成19年社団法人天草宝島観光協会設立とともに地域支援部長、平成23年4月より事務局長。雲仙天草観光圏協議会の事務局長も務める。

(表紙からの続き……)

天草は旅人を詩人にするらしい。

『街道をゆく』 司馬遼太郎



16世紀にもたらされたキリスト教は、永い苦難の歴史をへて営々と現代にうけつがれており、天草が、明治以降のキリスト教復活の歴史を体験できる国内でも数少ない場所であることに間違いはありません。それは歴史資料を展示した施設だけでなく、人びとの暮らしのなかに息づいています。しかし、それは暮らしのなかにあるからこそ、訪れる人には一定のルールと心得が求められます。

わたしども観光協会では、観光化された資源だけでなく、信仰を含めた生活文化そのものを体感できる特別な取り組みも行っています。

文豪や画家が描いた天草の美

年間400万人以上の観光客が訪れる天草では、観光地への目覚めは意外と早く、昭和初期に、おとなりの雲仙が日本初の国立公園の認定を受けると聞くと、有志を募って期成会をたちあげ観光協会を設立するなど様々な運動を繰り広げました。しかし天草が国立公園に認定されるのは昭和31年のこと。国のお墨つきには時間がかかりましたが、その間、文豪や画家が数多く訪れ、天草の美しさを様々に表現しました。

“天草松島”や“龍ヶ岳”“倉岳”といった観海アルプスから臨む多島海の風景、水平線に沈む雄大な夕陽、静かな漁村に佇む教会……。

司馬遼太郎は『街道をゆく』のなかで「天草は旅人を詩人にするらしい」と記しています。日本の近代文学に少なからず影響を与えた北原白秋ら「五足の靴」の一行は、天草を旅するなかで新しい表現を手にしました。また、青木繁は晩

年、天草を放浪し、海とともにある暮らしを描きました。

自慢できる故郷・天草

わたしは天草東海岸の静かな漁村に生まれ、30代半ばまでサラリーマンとして福岡と熊本で過ごしました。社会人として暮らすなかで、ふと自分の生き方に疑問が生まれ、それは際限なく膨らんでいきました。幼いころ夢見た姿とのギャップは、のみ込まざるを得ないことは理解していました。ただ明確な目標というか、使命感みたいなものを探していたのです。30代半ばになって初めて自分の生き方を考えたのかもしれませんが。

「故郷へ帰りたい……」。それは天草に生まれた人の多くがもつ希望です。わたしは広告代理店の営業マンから地元に関わる仕事を手にすることができ、とてもラッキーであったと今も思っています。旅先としての魅力をみなさまにお伝えし、天草を故郷にもつ人がこれからも自慢できる故郷であり続けるためのお手伝いをしていきたいと思っています。



天草キリシタン館